

正道を踏み至誠を推し、一時の詐謀を用う可からず

事大小と無く、正道を踏み至誠を推し、一時の詐謀(さぼう)を用う可からず。人多くは事の指支(さしつか)ふる時に臨み、作略(さりやく)を用て一旦その指支を通せば、跡は時宜次第工夫の出来るように思へども、作略の煩(わずら)ひ屹度(きつと)生じ、事必ず敗るるものぞ。正道を以て之を行へば、目前には迂遠なる様なれども、先に行けば成功は早きもの也。

西郷 隆盛

今月は、令和6年度の最終月ということもあり、仕事に臨む基本的な姿勢にも通ずる西郷隆盛の箴言を取り上げてみました。大意は、「どのようなことでも、道理にかなった正道を歩み、真の心を貫き、人をだますような手を使ってはならない。多くの人は、行き詰ったとき、どんな汚い手を使ってでもその場を切り抜けよう、そうすればあとは時の運でいろいろ工夫できると思うけれども、その使った手のせいで、必ずといっていいほど困りごとができ、結局は失敗するものである。正道を歩めば、目には遠く見えても、先に行けばかえって早く成就するものだ。急がば回れということである。」となります。(「新版南洲翁遺訓」角川ソフィア文庫より)

ちなみに、南洲翁というのは、西郷隆盛のあだ名です。この「南洲翁遺訓」の面白いところは、西郷の出身の薩摩藩の藩士が作成したものではなく、幕末の戊辰戦争の際、敵方であった庄内藩(現在の山形県鶴岡市)の藩士が、西郷の人格や徳を慕って書き記したものであるということです。

幕末の庄内藩は、他の東北諸藩に先駆けて、軍隊の洋式化、装備の近代化を遂げており、戊辰戦争の際は、政府軍と激戦を繰り広げ、個々の戦闘においてはほとんど負け知らずで、有利な戦況にあったのですが、時局には逆らえず、やむなく降伏します。その際に、政府軍の責任者であった西郷が、予想に反し、寛大な処分を行ったため、庄内藩士は、そのことに感激し、西郷を師とも仰ぐようになったと言われています。

前置きが長くなってしまいましたが、この箴言は、人の生き方としてはもとより、仕事の進め方の基本という観点からも、大事な要素が詰まっていると思われます。まず、仕事に臨むにあたり、「道理にかなった正道を歩み、真の心を貫き、人をだますような手を使ってはならない」ということは、まさに最も根本的なことと思われます。

一方、人生はままたらぬもので、仕事をしていれば、難局や試練がしばしば訪れます。そうしたときに、ついつい「どんな汚い手を使ってでもその場を切り抜けよう、そうすればあとは時の運でいろいろ工夫できると思」いたくなるものですが、この箴言にあるように、もしそのようなことをすれば「必ずといっていいほど困りごとができ、結局は失敗する」ということを肝に銘じる必要があると思われます。

以前から、研修等の場でお話しているように、不注意などによりミスをしただけでは、それが直ちに事故・不祥事になるわけではありません。そのことを隠蔽したり、誤魔化したりすることが、ミスを事故・不祥事としてしまうのです。職員の皆さんには、あらためてこのことを胸に留めておいていただくようお願いいたします。

令和7年(2025年)3月



一般財団法人 かながわ水・エネルギーサービス
理事長 松井 聡 明